

明治44年1月の石川啄木

桂 孝 二

1

38 何となく、

今年はよい事あるごとし。

元日の朝、晴れて風無し。(『悲しき玩具』)

これは、雑誌「創作」(第2巻第1号、明44.1.1発行)所載の「方角」9首中の1首である。正月発行の雑誌に見える作なので、前年12月中の作であると推定されるが、このような心持で、啄木は明治44年を迎えようとしていたのである。それについては、作者自身も明43.12.30付宮崎都雨宛書簡の追記のところに「僕は然し来年は屹度いい年だらうと思ってるよ。」と記しているのである。

明治43年9月15日、東京朝日新聞に「朝日歌壇」が設けられ、啄木がその選者となった。そして同12月1日に啄木の第1歌集『一握の砂』が東雲堂より出版されている。その好評であったことを褒書きするように、「早稲田文学」「秀才文壇」「創作」「精神修養」「学生」「曠野」の6誌から、新年号への作品を求められているのである。これが「早稲田文学」への初めての寄稿であったが、3月には「早稲田文学」へ作品を出しているほか、「文章世界」へも寄稿している。啄木短歌が歌壇のみならず、文壇にも迎えられたことを語るものと言えよう。後記するように、歌壇に啄木・哀果時代が訪れていたのである。そういう時であればこそ、上記の明るい気持の新年の歌が作られたのであろう。

ただし、その新年を実際に迎えての作は「東京朝日新聞」明44.1.8所載の「このごろ」8首中に見えるのであって、それによれば、必ずしも明るいものでなく、疲労のうちに迎えた新年であったのである。

47 何となく明日はよき事あるごとく

思ふ心を

吐りて眠る。

48 過ぎゆける1年のつかれ出しものか、

元日といふに

うとうと眠し。

49 それとなく

その由るところ悲しまる、

元日の午後の眠たき心。

心持は明るく、実際は疲労の中で、明治44年正月を啄木は迎えたのである。明治44年の啄木の日記は3日から始まっている。元日、2日を寝て暮らしたことを語るものであろうか。

2

明治43年10月22日、啄木の吉野章三宛書簡では、並木翡翠と丸谷喜市の2人で過日、仮面会と称して、浅草へんを4時間ほどぶらつき、その間、焼鳥、おでんを食い、活動写真、女芝居を数分間ずつ見、さらに12階下の私娼窟、これを啄木は塔下苑と称しているが、そこをぶらつき、さらに大弓場で弓を引いて遊んだことを報じ、続けて

「前記仮面会の一夜は、いかにも馬鹿げたることには候へども、これ実にこの2ヶ月余の間の小生にとりて唯1度の休息時間なりしことを御憐れみ被下度候、ことに先月中頃よりの匆忙は殆んど言語に絶し、3日に1べんの夜勤もあり、夜は毎晩暁近くまで仕事して、それでも後から後からと用が出来、殆んど不休の1ヶ月を過して今猶机上には二葉亭全集第2巻の校正と歌壇の投稿200余通山積致居候、もう2、3日にて歌集の校正と、また全集第3巻の原稿整理など始まるべく、いつか1日ゆっくり寝てみたしなど申して家人に笑はれ居候。」

と記している。また宮崎郁雨宛12月20日の書簡中につきのような文章が見える。

「昨日社から賞与を54円貰った。子供の葬式、野辺地の老僧が死んで父が行った時のおくれ、それから例の君も知っている筈の下宿屋ののこり（筆者しるす。明41,2年に下宿していた蓋平館別荘の下宿代借金の月払い分である。毎月5円ずつ払っていたようである。）そんなのを払ったら今朝はもうない。この歳暮の財政は何う勘定しなほしてみても25円許り足りない。僕の頭は暗い、つくづく厭になった。来年から家計の独立を謀らうと思って、月10円の金が欲しさに夜勤もやった。然しもう厭になった。年でも改まればまた気も出るかも知れないが、少くとも今の所では僕は何もかも厭だ。」

宮崎郁雨から25円送って貰った啄木はその礼状に長い手紙を12月30日に書いているが、その中で、こう書いている。

「この年末の僕1家の支出予算総額130円（この内約3分の2は、妻の約3ヶ月の医薬料下宿料その他に対する借金也）であった。それに対する収入には25円の不足があった。その25円は君の好意によって補はれた。僕はそれで可い筈だった。然し、愈々時日が切迫してくると共に、僕の立てた予算は幾多の欠点を暴露した。餅も搗かねばならなかった。年始状も出さねばならなかった。質も出さねばならなかった。質の利子も払はねばならなかった。火鉢の縁がとれたり洋灯がこはれたりした。子供の下駄も買はねばならなかった。老人達にも幾分の小遣を上げねばならなかった。かくて原稿紙に書いておいた予算案は赤く黒く幾度か修正された。さうしてとうとう15,6円の不足が正確になった。（中略）以上不愉快なことを書きつらねた。生活の不安は僕には既に恐怖になった、若しかうしてゐて老人でも不意に死んだらどうして葬式を出さう。そんな事を考へて眠られない事すらある。（中略）君、僕のこの1年間の悪斗が、僕の現在をどれだけも救はぬのみならず、また僕の将来に何物も貢献してゐない。僕はこの事を感じた。そこで僕はこの1月から少し方針を変へようと思ふ。さう思って僕は、二葉亭の仕事のあるのを口実に（口実ばかりではないが）夜勤をやめることにした。今迄は生活の事

許りを尊重して来たのを、今度は生活と共に健康と才能を尊重するといふ事を出来るだけ生活の尊重に一致させて行きたい。(つまり原稿を書いて売りたい) (以下略)」

つまり啄木は3日に1度の夜勤をやめて、自分の健康と才能とを尊重したい、原稿を書いて売って夜勤手当をカバーしてゆこうと考えたのである。新聞社からは従来、月給25円、歌壇手当8円、(朝日歌壇選料)夜勤手当10円、計43円貰っていたが、今度月給が3円昇給、夜勤手当を0とすると36円となる。これでは明治41年以来の蓋平館の下宿料の借金支払月5円が払えない、その他弁当代、小遣など若干の不足を生ずると言っている。これは、郁雨への相談であるが、それに賛成すると郁雨が毎月10円足らずを補助せねばならぬようになる文面のようなのである。

しかし、啄木は、自分の才能が世間に通用するという自信をもって、時間の浪費と身体の疲労のみになっている夜勤を明治44年からやめて、自分の健康と才能を尊重しようと考えたのである。(一定の収入をすてて小説一本で生活しようとする際の作家たちの心持もこのようなものであろうか)

こうして、来年からはと考えつつ、疲れ果てて、しかし希望を抱きつつ、啄木は明治44年の正月を迎えたのである。

3

明治43年1月3日、この日はじめてこの年の日記を書き始めている。

「平出君と与謝野氏のところへ年始へ廻って、それから社に行った。平出君の処で無政府主義者の特別裁判に関する内容を聞いた。若し自分が裁判長だったら、管野すが、宮下太吉、新村忠雄、古河力作の4人を死刑に、幸徳、大石の2人を無期に、内山愚童を不敬罪で5年位に、そしてあとは無罪にすると平出君が言った。またこの事件に関する自分の感想録を書いておくと。幸徳が獄中から弁護士に送った陳弁書なるものを借りて来た。与謝野氏の家庭の空気は余を楽しましめなかった。社では鈴木文治君と無政府主義に関する議論をした。」

こうして、幸徳秋水事件についての関心をもって啄木のこの年が始まっているのである。この陳弁書を啄木は、翌日と翌々日をかけて写している。5日の日記ではさらにこう記している。

「幸徳の陳弁書を写し終る。火のない室で指先が凍って、三度筆を取落したと書いてある。無政府主義に対する誤解の弁駁と検事の調べの不法とが陳べてある。この陳弁書に現れたところによれば、幸徳は決して自ら今度のやうな無謀を敢てする男でない。」

この陳弁書を5日、啄木は平出修に返し、自分の写したのを杉村楚人冠に社で貸している。この幸徳事件は1月18日特別裁判宣告があり、24名死刑、有期懲役2名、11年と8年とが宣告された。同20日に死刑24名中12名が無期懲役に減刑された。そして24日に管野すがを除く11名に死刑が執行され、翌25日に管野すがの死刑が執行された。啄木は23日、休みであったが「幸徳事件関係記録の整理に1日を費や」し、翌日24日、死刑執行の日、その事を聞き「何という早いことだらう」と思い、その夜「幸徳事件の経過を書き記すために12時まで働いた。これは後々への記念のためである。」と日記に記している。これが、彼の「日本無政府主義者陰謀事件及び付帯現象」であろう。なお、幸徳秋水の陳弁書を含む「A LETTER FROM PRISON」の方の完結はもっと遅くこの年5月以後であろう。

正月3,4,5,6日と秋水の陳弁書にかかずらった啄木は8日夜、丸谷喜市と並木翡翠の来訪を受け、仮面会を開き、浅草に遊んでいる。前記した前年10月のものの第2回なのであろう。日記によれば浅草に行き、木馬に乗り、豚肉を食い、塔下苑をぶらつき、さらに汁粉をたべて帰っている。このとき浅草から函館の友人へ寄せ書きを送っているが、二通とも書簡集に収められている。今その宮崎郁雨宛の中の啄木のものを記すがつぎのように漢詩体で、李啄木と署名している。

「新春与友遊塔下。 塔下園中夜寂々。

空屋軒暗歌笑遠。 初知天下不景氣。」

ところがこの日の浅草遊びに出かける時、啄木は、渋民村以来の友人瀬川深の手紙を受け取り、それを読みながら市電の停車場まで行っている。その翌日は休みだったが、啄木は長文の返書（約14枚）を書いている。この書簡は啄木の数多い書簡中、第1級のもと私は考えている。すこし抄出する。

「瀬川君、なつかしい手紙だった、年明けてから一度も遊ぶ暇の無かった処、昨夜は2人の友人に誘はれて散歩に出かけた。出かける時入口で君の手紙を手にした。さうして直ぐに封を切って読みながら歩いた。歩くに随って街灯の影が手紙の上を明るくし、また暗くした、僕の住所を態々東雲堂に問合せくれたという処まで読んだ時、何だかもうこの儘家に帰って、直ぐに返事を書きたいやうな気がした、それだけ君がなつかしく、また君の温い情に感謝された。本郷3丁目の停留場に立って、夜風にはためく長い手紙を凍った電車線路になびかせながら、静かに巻き納めた。巻き納めて、さうしてそれをイムバネスのポケットに蔵った時は、恰度、あの渋民の寺堤（用水池）の土手で、君がよく盛岡や江釣子村から寄越してくれた手紙を読み了った時のやうな気持になってゐた。」（中略）

「（僕の今作る歌は）作っても作らなくても同じものである。さうしてこの、作っても作らなくても同じだといふ事は、決して議論ではない、実際に於て僕は、作りたいやうな気持のしない事が何日、何カ月つづいたとて、少しも何とも思はない。平気でゐる、ただ僕には、平生意に満たない生活をしてゐるだけに、自己の存在の確認といふ事を刹那刹那に現れた「自己」を意識することに求めなければならないやうな場合がある。その時に歌を作る、刹那刹那の自己を文字にして、それを読んでみて僅かに慰められる。随って僕にとっては、歌を作る日は不幸な日だ。刹那刹那の偽らざる自己を見つけて満足する外に満足の無い、全く有耶無耶に暮らした日だ。君、僕は現在歌を作っているが、正直に言へば、歌なんか作らなくてもよいやうな人になりたい。」（中略）

「僕は1新聞社の雇人として生活しつつ将来の社会革命のために思考し準備してゐる男である。」（中略）

「僕は必ず現在の社会組織経済組織を破壊しなければならぬと信じてゐる。これ僕の空論ではなくて、過去数年間の実生活から得た結論である。僕は他日僕の所信の上立って多少の活動をしたいと思ふ。僕は長い間自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない、無論社会主義は最後の理想ではない。人類の社会的理想の結局は無政府主義の外にない。(君、日本人はこの主義の何たるかを知らずに唯その名を恐れてゐる。僕はクロボトキンの著書をよんでビックリしたが、これほど大きい、深い、そして確実にして且つ必要な哲学は外にない。無政府主義は決して暴力主義でない、今度の大逆事件は政府の圧迫の結果だ。そして僕の苦心して調査し且つその局に当たった弁護士から聞いたところによると、アノウちに真に暗殺を企てたのは4人しかない。アトの22人は当然無罪にしなければならぬのだ)然し無政府主義はどこまでも最後の理想だ、實際家は先づ社会主義者、若しくは国家社会主義者でなくてはならぬ。僕は僕の全身の熱心を今この問題に傾けてゐる。『安楽を要求するは人間の権利である』僕は今の一切の旧制度に不満足だ」

「君、僕はこの手紙を書くに約3時間かかった、今日は社は休みだった。さよなら。」

この手紙の冒頭と末尾の文章は全くすばらしいと思う、こういう文章がすらすらと書ける啄木の才能はやはり高く評価すべきであろう。なおこの書簡に見える短歌観と社会主義思想について一言しておきたい。

啄木の短歌に対する考え方は「一利己主義者と友人との対話」(「創作」明43.11)の中で「刹那刹那の感じを愛惜する心が人間にある限り歌というものは滅びない。」と言い、「歌のいろいろ」(「東京朝日」明43.12)で「一生に二度と帰って来ないいのちの1秒だ。おれはその1秒がいいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番なのだ。」と言っている。しかし、それとともに「故独歩は嘗てその著名なる小説の一つに『驚きたい』と云ふ事を書いてあった。その意味に於ては私は今でも驚きたくないことはない。然しそれと全く別な意味に於て、私は今(驚きた

くない)と思う。何事にも驚かずに眼を大きくして正面にその問題に立向いたいと思ふ)「歌のいろいろ)と言っている。その立向いたいと思うことの一つに、たとえば大逆事件があったのであろう。しかし、それに目を大きくして立ち向ったところで啄木に何ができたであろうか。同じ文章で啄木は「凡すべての事は、それが我々にとって不便を感じさせるやうになって来た時、我々はその不便な点に対して遠慮なく改造を試みるのが好い、またさう為るのが本当だ。」と書いているが、そのことについてこうつづけて言っている。結局「私自身が現在に於て意のままに改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置とそれから歌ぐらるなものである。謂はば何うでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の真に私に不便を感じさせ苦痛を感じさせるいろいろの事に関しては、一指をも加へることが出来ないではないか。否、それに忍従し、それに屈伏して惨ましき二重の生活を続けて行く外に此の世に生きる方法を有たないではないか。自分でも色々自分に弁解しては見るものの、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、知識売買制度の犠牲である。目を移して、死んだもののやうに畳の上に投げ出されてゐる人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。」(「歌のいろいろ)という見方となるわけである。この短歌観が瀬川宛書簡でも上記のように記されているわけである。短歌革新以上に啄木のやりたかったことは、この瀬川宛書簡に見えるように「社会革命」であり、「現在の社会経済組織を破壊」することであったのである。しかし、啄木はそれに一指を加えることもできない。それ故に啄木は「将来の社会革命のために」と言い、「他日」と言い、「準備してゐる」と言っているのである。ところが、その希望の一端が叶えられそうな状況が生れてきた、土岐哀果との対面によってである。上記瀬川宛書簡は1月9日であり、哀果の啄木訪問は1月13日であった。

4

年初、幸徳秋水の陳弁書を借りて写し、1月9日に前記瀬川宛書簡を上記のように記し、1月11日には丸谷喜市の下宿で「平民の中へ行きたい」と言った

と日記に記している。その翌日1月13日に啄木は土岐哀果と初めて逢うたのである。哀果土岐善麿の『啄木追懐』（昭2刊）を読むと、その個所が興味深い。前日の電話での約束により、この13日、啄木が朝日新聞社よりの帰途、読売新聞社の哀果を訪い、自分の本郷弓町の理髪店の二階借りの部屋に迎えて話し会ったのは、まことに意義深い一夜であった。

哀果はこの対面について、「実際僕等2人はもっと早く、少くも半年は早く逢ってるのが本当なので、それが僕の啄木に対する礼儀でもあったに相違ない」と書いている。半年近くと言い、礼儀でもあったと言っているのは、啄木が前年8月の朝日新聞に哀果の処女歌集『NAKIWARAI』に対して理解と好意ある評を書いたことを感謝しているのであって、「その短い啄木の文章は、僕のまだはっきりと考えてるなかったことまで、いつてくれたところのあるのを感じて、僕の作歌道程に新しい意義をあたえてくれたことも事実だった。」とも書いている。しかし、その感謝の念が面会にまで至らなかったのは「彼に対して一種の羨望を僕ももっていたことが無いとはいへない」と記しているように新詩社以来の高名な詩人啄木に一種のひけ目を感じていたのであろう。

そうして、そのうち啄木の歌集『一握の砂』が出版されたのを読み、量においても『NAKIWARAI』より豊富であり、ずっと切実であったと感嘆している。そして、そのころから「歌壇や一般の興味が次第に『啄木・哀果』を並称して、僕の存在を認めてきたことに對し、内心まだ自分の力を信ずるまでには至らなかったが」同じ明治43年12月に啄木が朝日新聞に「歌のいろいろ」を發表しはじめ、その第3回めに、哀果の歌を引用し、それを認めたことに「僕はびっくりした。胸をドキドキさせながら読み返した。僕は啄木によって僕の作品の『価値』と『意義』とを一層はっきりと発揚されたのだ。早稲田の学窓時代から、親しい交遊をもった若山牧水などが、その『創作』誌上、僕の歌に非難を加へたりした一方、これほど理解あることばを聞かせてくれる友達、しかも未見の友達のあることに、僕は感謝したのだ。」と哀果は記している。

これで、哀果と啄木との面会の用意がほぼできたわけであるが、ここにもう1つのキッカケがあった。それは、明治44年1月10日の読売新聞に載せられ

た「新年の雑誌 (1)」である。筆者は K 生、実は楠山正雄である。この文章は当時の歌壇を語り、その中で啄木・哀果を位置づけているので、長文であるが引用しておこう。

「今日は歌のことを書く、何時の頃からかまた和歌といふものが吾人の興味に近いものになった。自分で真似をして三十一文字を並べることが強ひられずに、ただ小説好きが小説に耽耽と同じ心持で和歌に對することが出来るやうになった。否時としてはだらだら長い小説より短い三十一文字は直ちに日日の生活から来る実感の断片が鋭く閃き出ることがある。吾人は和歌の愛読者になった。昨年の上半年は牧水氏、夕暮氏の歌が盛に吾人の心を惹いた。中頃に吉井勇氏の歌が吾人とはまるで違った生活をしてゐる人でありながら、卒直に言放した歌に強く吾人の胸に響くものがあった。年の暮近くになって土岐哀果石川啄木といふ名が何の因縁か並べて呼ばれることになった。今のところ吾人の和歌に對する興味はこの 2 人の作によって最も多く支配されてゐる。(中略、ここで 2 人がともに 3 行書きを行なっていることを書き、啄木短歌 5 首哀果 8 首を引用し、啄木作については腹を引掻き廻されるやうに感じたと書き、哀果については、ただ読んでゐれば味が出て来ると評している。) 明治の和歌はこの頃になってやっと万葉時代の權威を回復した觀がある。考へて見ると子規一派のやつてゐた万葉復活は形式ばかりの兎戯であつた。」

この文章について哀果は「楠山君はいはゆる『歌壇』に交渉のある人ではない。その論評がたまたま啄木・哀果の傾向にわたつたことは、むしろ 2 人の存在が、歌壇以外の興味までひろがって来てゐた事情を看過し難い。僕が初めて啄木に電話をかけて、逢ひたいと言つたのはこの楠山君の記事の掲載された二三日後のことだつたのだ」と書いている。以上が哀果が啄木に面会を申込むまでの経過である。

5

明治 44 年 1 月 13 日、この 2 人の初対面の夜、哀果が言い出して啄木が賛成

して、2人で雑誌「樹木と果実」を出そうという話がまとまったのである。

その翌日の14日に啄木は宮崎郁雨へ詳しい手紙を書いている。その手紙で、昨日、土岐哀果と会見したこと、2人で雑誌を出す相談ができたことを報じ、今や歌壇に2人の時代が来ている。その機運を空しく逃がしたくない。それ故、雑誌発行の相談に賛成したのだという風に知らせている。啄木はこの郁雨宛書簡で、雑誌発行の経費について詳しく計算し、可能なことを述べ、それに必要な前金購読者の勧誘をたのんでいるのである。さて、啄木は、その雑誌発行によって歌壇の名声を得ようという考えではなかった。それはつぎに示す小田島理平治宛書簡（明治44年2月14日）で明らかである。

「我々は嘗て我々の好きなロシアの青年がなした如くに、自分の目を広く社会の上に移し、出来うべくんば、我々の手と足をとも他日その方に伸ばしたいと思ふのであります。我々は文学本位の文学から一步踏み出して『人民の中に行』きたいのであります」

前記瀬川宛書簡で啄木は自分を實際家と呼んでいるが、歌人としての名声を得はじめた機運を捉えて、歌を主とする雑誌「樹木と果実」を出すことによって自分の希望をすこしでもかなえようとしたのである。

その雑誌の目的とするところを啄木はつぎのように言っている。

「僕自身は欠点だらけな、そのくせ常に何か實際的理想を求めずにはゐられぬ男であるとすれば、僕の進むべき路が君子の生活でない事も、純文学の領域でないことも略明白だらうと存じます。もうこれだけでお察しの事と存じますが、つまり僕は来るべき時代（それは少くとも往年の議会開設運動より小さくないと思ふ）に一髪力でも添へ得れば満足なのです。（中略）『時代進展の思想を今後我々が或は他の人かが唱へる時、それをすぐ受け入れることの出来るやうな青年を、百人でも、二百人でも養って置く』これこの雑誌の目的です。（中略）我々のこの雑誌を、1年なり2年の後には、文壇に表はれたる社会運動の曙光といふやうな意味に見てもらふやうにしたいと思つてゐます。」（「平出修宛書簡」明治44年1月22日）

「表面は歌の革新といふことを看板にした文学雑誌ですが、私の真の意味

では、保証金を納めない雑誌としての可能な範囲に於て『次の時代』『新しき社会』といふものに対する青年の思想を煽動しようといふのが目的なのであります。発売禁止の危険のない程度に於て、しょっちゅうマッチを擦っては青年の燃えやすい心に投げてやろうといふのです。(中略) かうして極く小規模にやってゐるうちには、何れ発展の機会もあるだらうと思ひます。2年か3年の後には政治雑誌にして一方何らかの実行運動——普通選挙、婦人開放、ローマ字普及、労働組合——も初めたいものと思つてゐます」(「大島経男宛書簡」明治44年2月9日)

そして、「精神修養」第2巻第3号(明治44年3月)の広告に「樹木と果实」発行の宣言文が出ている。日記によれば、明治44年1月16日に執筆したものである。

「雑誌『樹木と果实』は赤色の表紙に黒き文字を以て題名を印刷し、土岐哀果、石川啄木の2人之を編輯する。雑誌はその種類より言へば正に瀟洒たる一文学雑誌なれども、2人の興味は寧ろ文壇の生活に有らずして広く實際社会に向へり、2人の歌は所謂歌に非ずして日常事務的生活の間に発見せられたる貴重なる記録かつ峻峭たる批評なり。雑誌の立つ処時文壇の諸系統以外にあらざるべからず。雑誌の将来に主張せむとする所亦自ら然らむ。2人は身自ら文学者を以て任せざるの誇りを以て此の雑誌を世の文学者ならざる人々に提供す。」

こう見てくると、啄木は雑誌発行によって、「文学者ならざる人々」に呼びかけて、大げさな言い方をすれば人民の中へ行こうとしたのである。本来の目的は文学本位ではないが、性急に進むよりは實際的に進もうという考えで歌の雑誌としたのである。しかし、目標はまさしく「人民の中へ」であり「次の時代」のための青年の育成であった。そして、なお注意すべきは、「歌は私の悲しい玩具である」という消極的な見方が、この雑誌発行計画直前の瀬川宛書簡にまで見えていたが、これは宣言であるためいささか気負い立っているのかも知れないが「2人の歌は所謂歌に非ずして日常事務的生活の間に発見せられたる貴重なる記録かつ峻峭たる批評」であると言つて、自分たちの歌に積極的な

意義を認める立場に至っていることである。そこではもはや短歌は悲しい玩具ではないのである。

6

211 田も畑も売りて酒のみ

ほろびゆくふるさと人に

心寄する日（「スバル」明43.11.『一握の砂』）

62 百姓の多くは酒をやめしといふ。

もっと困らば、

何をやめるらむ（「創作」明44.2.『悲しき玩具』）

はじめの『一握の砂』の1首は概括的に言っていて、そういうふるさと人に對する感傷である。もっともこの歌とともに「スバル」に発表され、『一握の砂』にも収められた作に

212 あはれかの我の教へし

子等もまた

やがてふるさとを棄てて出づらむ

247 ふれさとに入りて先づ心傷むかな

道広くなり

橋もあたらし

というような作も見え、併せて考えると単なる感傷とは言えない。道も広くなる、橋も新しく大きくなる、そういうふるさとで、農民は相変らず貧しくて、酒を飲んでうさばらしをしつつ貧しくなってゆき、青年は仕事を求めて村を出てゆかざるを得ない。残された者は酒を飲んで益々貧しくなってゆくばかりである。ここにも「記録と批評」があるようであるが、前記211の1首に見えるのはどうも仕方がないという感傷であろう。それに対し『悲しき玩具』所載の「百姓の多くは」の1首は、明治44年1月11日の日記に「米内山が来

て、東北の田舎でも酒の売れなくなった話をした。」とあるが、その伝聞から触発されたもので、「何をやめるらむ」の句は、啄木流に淡々と詠んでいるが、この背後にそういう唯一の楽しみまで奪われた農民をどうするのかという詰問がこめられているようで、まさしく「批評」以上であると言えよう。こう見ると第2歌集『悲しき玩具』の方が第1歌集『一握の砂』より進んでいることが認められる。

幸徳秋水の獄中よりの陳弁書を入手して感激したこと、哀果との面会によって雑誌発行の計画が立ったこと、この二つによって明治44年1月は啄木にとって、まことに有意義なひと月であった。日記によれば、啄木は、幸徳事件や雑誌発行について多くの人びとと語り会ったことがうかがえる。1月3日から2月4日の入院までの1カ月間に語り合った人と回数を記すと、杉村楚人冠1、鈴木文治1、渋川柳次郎1、平出修4、丸谷喜市9、並木翡翠4、谷静湖1、父1、土岐善麿3、花田百太郎2、又木1、高田1、阿部康蔵1、矢口1、若山牧水1である。そのほとんどは1人または2人相手であるが、1月28日の啄木宅での茶話会は会費10銭で7人が集まり10時ごろ遠くの者が帰り、それから啄木は婦人問題について丸谷喜市と議論し、11時ごろ皆が帰ったとある。このような活動も思いかけず、2月4日、慢性腹膜炎によって啄木が入院したために中絶してしまったのである。啄木にとっても惜しいことであり、日本の新しい文学にとっても、社会主義運動にとっても惜しいことであったと思う。

啄木は2月4日入院、病床にあっても、土岐哀果とともに雑誌発行について努力したけれど、集まった原稿をたのんだ印刷屋の不誠意のために発行を断念するに至った。また3月15日に退院したけれど、以来自宅療養、新聞社へ通勤することもなく、文学活動も、明治44年8月ごろをもって絶え、翌明治45年5月5日、肺結核のため28才で死去したのである。それ故に筆者は啄木の明治44年1月の活動を高く評価するとともに、それがそれ相当の実を結ばなかったことを啄木のためにも悲しく思うのである。悲劇とも言うべきであろうか。

なお、筆者は1月28日の啄木宅での茶話会で、丸谷喜市と議論したことが、作りかえられて、「呼子と口笛」中の「はてしなき議論の後」など（明44.6.15作）になったのであるまいかと考えるのである。後の啄木にとってもこの明治44年1月は記憶すべきものであったのであろう。